

認知症センター

(三重県基幹型認知症疾患医療センター)

■ スタッフ

センター長 富本 秀和
副センター長 佐藤 正之
医師 木田 博隆

医師数 常勤 2名
併任 1名
非常勤 0名

三重県基幹型認知症疾患医療センター

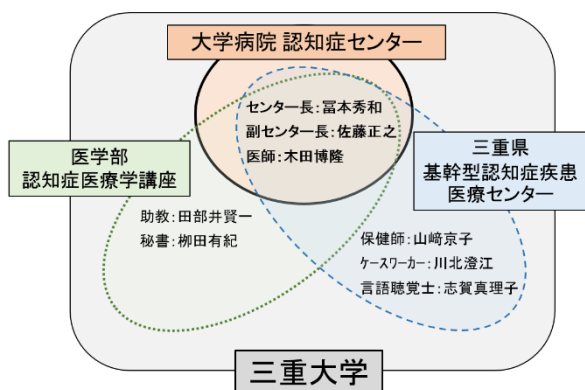
コメディカル 保健師 1名
精神保健福祉士 1名
言語聴覚士 1名

三重大学医学部 認知症医療学講座

助教 田部井賢一

■ 認知症センターの特色

認知症患者は全国で 400 万人を超え、平成 25 年末に国全体での緊急対策を要する国家プロジェクトに格上げされています。認知症センターはこのような医療環境の変化に対応すべく活動を行っています。センター発足は、平成 25 年 9 月で専任医師は 2 名が在席しています。同センターは、平成 22 年に設立された医学部認知症医療学講座、同 24 年に三重県の委託を受け大学病院内に設置された三重県基幹型認知症疾患医療センターの中核に位置づけられ、中勢地域を中心にして、県下全域の認知症診療の拠点として活動しています。



■ 体制と実績

1. もの忘れ外来

新患外来を（火）（金）、再診外来を（月）（水）の午後に行っています。認知症の診断は詳細な病歴と日常生活の情報が不可欠なため、患者と家族に念入りなインタビューをいたします。そのため新患外来は完全予約制とさせて戴いています。院内コンサルテーション、かかりつけ医からのご紹介、患者・家族の当外来受診希望がそれぞれ 3 分の 1 ずつを占めています。診断と初期治療の導入が図られた後は、基本的にはかかりつけ医に逆紹介し、継続診療をお願いしています。

認知症はひとつの病気ではなく、初期の鑑別診断が重要なため、脳 MRI、神経心理検査、必要に応じて SPECT などの核医学検査を行います。平成 26 年度は百数十名の新患をお迎えしました。院外からの紹介では、意味性認知症や進行性非流暢性失語症など、専門的知識の必要な症例が多く

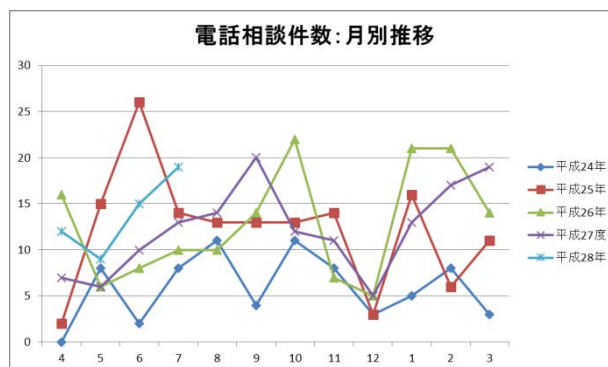
もの忘れ外来担当表

	月	火	水	木	金
午後	木田 (再来)	佐藤 (新患)	佐藤 (再来)	休診	木田 (新患)

含まれています。

2. 電話相談窓口

保健師、精神保健福祉士、言語聴覚士が毎日、専用回線での相談業務を行っています。相談件数は、開設年の平成 24 年度が 71 件で、その後は毎年約 150 件の相談を頂いております。相談内容は、受診や療養相談に関することが多く、お話が 1 時間に及ぶこともしばしばです。具体的な情報提供やアドバイスだけでなく、介護者の悩みや感情を受け止めることにより、介護ストレスの軽減、ひいては認知症患者の療養環境の維持・改善に役立っています。



3. 津地域事例相談会

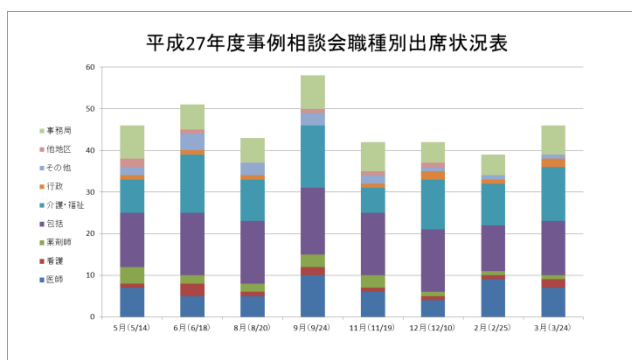
当センター医師、三重県基幹型認知症疾患医療センター職員が中心となり、認知症の具体事例の検討会を年 8 回、三重県医師会館にて行っています。津地域の医師会の先生、基幹病院の認知症担当医師、保健師、包括支援センターや福祉施設の職員、調剤薬局の薬剤師、行政担当者など、平成 75 年度は 367 名の多職種の方々にお集まりいただきました。

毎月直接顔を合わせることで「顔の見える関係」が出来上がり、認知症の地域ネットワークの構築に繋がっています。また、津地域の認知症に関連する施設などの情報の共有、コメディカルや福祉職



ある日の相談会。事例の提示の後、6～8名の小グループに分かれてディスカッションを行い、順番に発表します。各グループには医師、保健師、薬剤師などさまざまな職種が含まれるようにしています。

員の技能の向上にも役立っています。



4. 認知症家族の会「えそらカフェ」

毎月第一金曜日に、大学病院 12 階の「四喜折々」で、認知症患者の介護者に集まっていただき、座談の場を提供しています。小グループに分かれ、介護にまつわる苦労や悩みをお話いただき、必要に応じ

てスタッフが対応します。他の介護者の体験を聞くことにより介護のヒントを得たり、同じ悩みを共有することにより孤独感から解放されたりといった効果がみられます。隔月でスタッフや院内外の講師によるミニ講座も行い、介護者の認知症への対応力を向上する一助としています。

5. 音楽療法

近年、興奮や妄想などの認知症の BPSD (behavioral and psychological symptom of dementia) の予防と治療に音楽療法が有効とのエビデンスが蓄積されています。当院では平成 24 年度から、認知症患者を対象とした音楽療法を自由診療とし、日本音楽療法学会認定の音楽療法士が医師の監督の下、週 1 回 1 時間の音楽療法を行っています。患者様が参加されている間、ご家族はその様子をご覧頂き、時には参加していただくこともあります。閉じこもりがちだった患者が外出やデイサービスを利用する契機となったり、毎週患者・家族、スタッフが顔を合わせることで症状の安定や変化の早期発見に繋がっています。

6. 「脳健康見える手帳」(三重県認知症連携パス)

厚生労働省が定めた「認知症施策推進 5 ヵ年計画 (オレンジプラン)」では、第一項目に認知症ケアパスの策定があげられ、平成 27 年度からの運用が求められています。当センターは、三重県医師会、三重県と協力して「三重県認知症連携パス (脳健康見える手帳)」を作成しました。認知症の初期診断からフォロー、療養・介護に至るまで、あらゆる職種のひとが全経過で使用可能です。また、お薬手帳を収納するケースも備えており、これさえあれば認知症の診療・ケアに必要な情報がすべてわかるまさに“オール・イン・ワン”の冊子です。冊子の内容は三重県基幹型認知症疾患医療センターのホームページから無償でダウンロードできます。

7. “認知症出前スクリーング”の施行

地域のかかりつけ医の先生から「認知症かなと思っても、専門医に紹介すべきか、判断に迷う」、市民からは「もの忘れが気になってもどこに行けばよいか分からない」という声が多く寄せられます。これらの問題に対処するため、また前述の「脳の健康みえる手帳」の利用を推進するため、当センターは平成26年度から三重県医師会と協力して、「認知症ケアの医療介護連携体制の構築」(認知症出前スクリーング)を始めました。三重県桑名市・鈴鹿市・津市・伊勢市に各1名、市の協力のもと認知症連携パス推進員を配置し、患者・家族から相談を受けたかかりつけ医が推進員にスクリーングを依頼。推進員はMMSEなどの簡単な認知機能・生活状況の評価を患者・家族から行い、当センター医師に報告し、「専門医受診」か「経過観察」かをコメントを添付して返答します。平成27年度に約180名の利用者があり、MMSEの平均点は24点と、認知症の早期発見に役立っています。また、慢性硬膜下血腫などの“治る認知症”が発見された方もおられ、地域における認知症の早期発見・診断・治療に有効なシステムと期待されています。



8. 認知症サミット in Mie




2013年にロンドンサミットが開催されて以来、毎年サミット開催地で“認知症サミット”が開催されています。今年5月に伊勢志摩サミット開かれたのを受け、10月14・15日に四日市で“認知症サミット in Mie”を開催します。当センター長の富本教授が実行委員長を務め、日本が得意とするものづくりと認知症の医療・介護の現場を繋ぐことを目的とし、多くの企業にも参加していただきます。今後、認知症患者数の爆発的な増加が予測されるアジアにおいて、本邦が指導的役割を果たしていくきっかけになると期待されます。

9. 啓発・普及・調整活動

現在、三重県には二次医療圏ごとに認知症疾患医療センターが4箇所、設置されています。しかしその認知度は低く、三重県が施行した調査によると、認知症疾患医療センターという名称を知っている県民は1割にも達しません。当センターは三重県基幹型認知症疾患医療センターを受託しており、「認知症疾患医療センター連携会議」を開催し、情報や各地域の抱える課題の共有に努めています。また、認知症やセンターの存在を県民に知ってもらうために、様々な講演会や市民公開講座を企画するとともに、ポスターを作成して啓発活動を行っています。

■ 今後の展望

現在、認知症患者は全国に 462 万人おり、2025 年には 700 万人を超えると予想されています。少子・超高齢化を迎える本邦にとって認知症は、医療だけでなく社会、経済の喫緊の課題です。「いずれ認知症になるなら三重県民でよかった」と言って頂けるように、一般住民を含む関係各位と協力しながら体制づくりを進めていきたいと思いをします。

 <http://www.hosp.mie-u.ac.jp/section/bumon/ninchisho/>